

・読み書きができたユダヤ人

キリスト教徒の農民や庶民の多くが身につけていなかった**識字能力を身につけ、読み書きができたユダヤ人**が、都市に居住するようになって、金融業、商取引に従事したことは、まさに理に通っていた。読み書きを通して自ら学び、考え、よりよい有益なものを勘定ずくで追求することができたということは、外来者としての彼らに特別な生きる道が開かれていったことを意味する。

キリスト教社会の偏見や差別の中で、都市に集住するようになったユダヤ人は、その時々**の迫害や略奪、追放に耐えながら、為政者による保護の名の下に、数々の課税、賦課を負わされ、それでも自分たちの神ヤハウェへの信仰を放棄することなく、最終的な救いを堅く信じて生き抜いていったのである。**なればこそ、彼らは人一倍賢く、知恵にすぐれ、時には人一倍狡猾に立ち回らなければならなかった。

ユダヤ人の優秀さと業績が讃えられる一方で、彼らの負の面がいつもクローズアップされるのは、“**生かさず殺さず**”の運命を強い**られた都市の民、少数派ユダヤ人の歴史的宿命**だったのである。

・ユダヤ人居住地区内で金貸し業

キリスト教社会からの締め出しという経過の中ではじまり、発展した少数派**ユダヤ人の貸金業**は、周囲からの孤立、差別、規制の中で行われなければならなかったため、きわめて不安定な生業であった。

居住する都市内に店舗をかまえて商売をすることができなかった彼らは、ユダヤ人居住地区内で金貸し業を行った。この金貸し業が、彼らにとってほとんど唯一の専業となっていた。商取引、行商などの道はあったが、何といたっても金を貸して利息を取り、それで生計を立てるといのが、主要な収入源だった。しかし、またそれは定住と滞在の保障がない放浪の民にとっては都合のよい職業であった。というのは、財産を金で持っていれば、いざという時はいつでもどこへでもすぐ移動できたからである。

金貸し業は額に汗して働く体力のかわりに、人一倍の賢さや知恵を必要とする職業であった。それはいつも不安定で、リスクに満ちた冒険のような仕事だったからである。貸す金の額が高ければ高いほど危険だった。ともすれば、貸付金の利息はおろか、元金さえ返してもらえないこともある。特に多額の借金をした王侯貴族や司教などは、借金と利息で首がまわらなくなると、逆に金を貸したユダヤ人を糾弾し、違法、不法行為を見つけ出したり、でっち上げたりして追放処分にし、借金を踏み倒す手段に出たからである。捕えられ、**処刑されて命を失ったユダヤ人金貸し業者**もいた。

・ペストが流行した時のユダヤ人迫害

中世最大の**ペストが流行した時**（一三四八～四九年）、全ドイツをはじめ、ヨーロッパ各地で起ったユダヤ人迫害は、借金から解放されるまたとないチャンスとなった。迫害によるユダヤ人の虐殺、逃亡、追放は、多くの負債者を一挙に解放したのである。

またユダヤ人史上しばしば見られた都市ユダヤ人地区（**ゲットー**）の略奪は、単に借金の証文を奪い取って焼き捨てたり、質入れ品を取り返すだけではなく、ユダヤ人所有の金品を強奪する機会にもなった（例えば、一六一四年のフランクフルト・ユダヤ人ゲットーの略奪）。

「不当な手段（高利貸し）と**非情な心でもうけたユダヤ人の富は、場合によっては取り戻してもよい**」という感情が庶民の間には常に潜在していたからである。

・戦争の装備や資金の仲介者、調達者としてのユダヤ人

ユダヤ人の歴史を通観していつも思うのは、彼らが、「**調達**」や「**仲介**」という仕事にきわめて優れ、その能力や条件を備えていたということである。

調達や仲介は、常に先見、予測、組織力、連帯、判断力、スピードを必要とし、その行動範囲が広がれば広がるほど、よりすぐれた、より大がかりなそれらが不可欠であった。それらに加えて欠かすことのできない現実的な実力は、資金力、資金調達能力であった。中世末期から近代にかけ、ユダヤ人エリートはこの調達ということにおいて、すぐれた能力を発揮し、新たな歴史の舞台に登場することになる。

ドイツを舞台にして行われた全ヨーロッパ規模の三十年戦争（一六一八―四八年）以来、ユダヤ人は戦争の装備や資金の仲介者、調達者として著しい進出を見せたのである。こうした分野でのユダヤ人史研究の権威 H・シュネーは、「三十年戦争からナポレオンの支配からの解放戦争（一八一三年）まで、ユダヤ人の仲介、関与なくして行われた戦争はほとんどない」と述べている（『ドイツ史上の宮廷ユダヤ人』七頁）。

・戦時におけるユダヤ人の調達能力と才智

どんなに物資が不足していても、誰も調達できない時でも、ユダヤ人だけはありとあらゆる方面へのつながりにより、どこからか、何とかして調達してしまうという、彼らの才能、知恵、組織力に、君主や諸侯の多くが頼らざるを得なかったのである。

三十年戦争以後の一七世紀後半においても、ヨーロッパへの侵入を図るオスマン帝国に対するハプスブルク家の攻防戦費や軍事物資の調達、フランスのルイ十四世のプファルツ征服戦争を阻止するための連合軍の装備や兵士に支払う手当の調達なども、ユダヤ人資本家の国際的協力によって実現されている。その後も、戦時におけるユダヤ人の調達能力と才智は、一九世紀にいたるまで必要とされてゆくことになる。

・「情報に強い」ユダヤ人

後の時代にドイツに生れたユダヤ人パウル・ユーリウス・ロイター（一八一六～九九年）が通信社（現トムソン・ロイター）を設立したように、情報を売りものにするユダヤ人の能力と才知は、すでにバロック王朝時代より定評があった。ドイツを代表する世界的日刊紙「フランクフルター・アルゲマイネ」の創刊者 L・ゾンネマンもユダヤ人であったというのもほんの一例である。ユダヤ人の優秀さ、他に抜きん出る能力の一面は、この「情報に強い」ことによる。

刻々と変わる国際状況の変動や経済危機の到来などを誰よりも先に探知し、把握しなければならない外交官の任務は、ユダヤ人にとってつけの仕事であった。しかし、外交に携わったユダヤ人の活躍や貢献は、危機が去り不要になると、すぐに忘れ去られてしまうのが常であったということも記しておかねばなるまい。

・ユダヤ人の伝統

すでに古代末期ローマ帝国におけるキリスト教会の政治的勝利の下で、罪深い流浪、不退転の民としてのレッテルを貼られたユダヤ人は、中世から近代にかけてのあらゆる差別、規制、侮り、隔離、迫害、虐殺、略奪、追放、搾取、そして罪の捏造、責任転嫁に耐えて生き抜かなければならなかったため、それなりの処世術、知恵、知識、賢明さ、判断、行動力を常に必要としていた。そして、どんなことがあろうと、彼らは自分たちの存在の要である「信仰と伝統」を放棄したり、他に融合、迎合することはなかったのである。

それだけに不安と孤独の中で次々とふりかかってくる試練や困難への対処は、ユダヤの民の知恵や賢さ、そしてしばしば狡猾さにも磨きをかけていったのであった。おかれた状況や環境が厳しければ厳しいほど、より真剣に深く考え、賢明に判断し、行動することを学び、実践していった。常に学び、知恵に富み、賢明であることは、彼らの聖典が絶えず教え、諭し、命じているところであり、このユダヤ人の伝統こそ、後々彼らの実力、優秀さ、業績となってあふれでる源泉となってゆく。

・ユダヤ人解放

ヨーロッパ中世の秩序と観念を打ち破ることになったルネッサンスと宗教改革運動は、人間の思考、思想、行動に大きな自由をもたらし、従来の神の啓示や権威に頼らず、人間の理性のひらめきや力に信頼し、森羅万象を解明しようとする啓蒙思想を発展させていった。この思想運動から生まれたヒューマニズムや理性主義は、規制と差別、偏見の中で生きることを強いられているユダヤ人の在り方に大きな疑問を提起することになり、ついにフランス革命の勃発と革命精神の伝播は、一〇〇〇年以上続いた状況からユダヤ人を解放することになる。

・都市の民であるユダヤ人の職業は「医者か弁護士か」

孤立した社会の中で業績をあげる道として選んだのが、自分一人の力で自己実現を図るという運命の道であった。つまり一匹狼の道である。

いつまでたっても消えることのない偏見、蔑視、よそ者扱いに直面した彼らは、先人から受け継いだ研学の精神と伝統をもとに、他に勝る高い教育、教養を身につけ、自己に専心し、一人出世で自己実現へと奮起したのである。キリスト教の洗礼を受けることも、もはや社会への同化には役立たないことが明らかであった。国家の機構や組織に入り込み、官僚、役人、裁判官、軍人等で立身出世をすることも困難であることを察知したユダヤ人エリートは、いづどこにいても必要とされ、一人で営むことのできる医者のほか、幼い時から神の律法を学び議論して身につけた伝統から法学を学び、組織の一員にならずにできる弁護士業を先取した。この二つの職業は、人口が集中している文化、経済の中心である都市で需要の多い職種だったからである。都市の民であるユダヤ人の職業といえば、「医者か弁護士か」といわれるほどであった。

・シオニズム

一九世紀末以降、次第に高まってゆくユダヤ人のナショナリズムともいうべきシオニズム（建国）運動は、何としても克服できない周囲のユダヤ人憎悪に絶望したユダヤ人エリートによる、安住の地としてのパレスチナ建国（シオニズム）運動であった。

・「ポグロム」

ロシアの農奴制廃止などをはじめ、数々の改革を通してロシアの近代化を図っていた皇帝アレクサンドル二世（在位一八五五～八一年）は、サンクト・ペテルブルグで急進派テロの凶弾に倒れた。この事件を契機にその責任がユダヤ人に転嫁されたため、解放後の農民の貧困、不満が爆発してウクライナ地方一帯でユダヤ人の大迫害が起った。貧しい素朴なロシア農民や日雇い労働者たちは、ユダヤ人を特権階級の手先、代行者として憎悪し、集団で襲い、略奪、虐殺をほしきままにしたのである。いわゆる「ポグロム」である。

ロシア政府はこのポグロムからユダヤ人を救おうとせず、かえって反ユダヤ政策の強化に利用したため、難を逃れようとロシアのユダヤ人は大挙して西ヨーロッパへ流れ込んだ。

・シオンの丘

ヨーロッパ社会における同化、共生に失望したユダヤ人の中から生まれてきたのがシオニズム運動である。この運動は一九世紀末より東欧から逃れてきたユダヤ人を中心に展開された。ユダヤ民族の永年の故郷、シオンの丘、エルサレム（パレスチナ）に自分たちの安住の国を再建しようとする動きの背景には、ユダヤ人のナショナリズム運動の一環が見られた。

ディアスポラ

-----Web 情報-----

ディアスポラ（δ ι α σ π ο ρ á、英：Diaspora, diaspora、ヘブライ語：גלות）とは、（植物の種などの）「撒き散らされたもの」という意味のギリシャ語に由来する言葉で、元の国家や民族の居住地を離れて暮らす国民や民族の集団ないしコミュニティ、またはそのように離散すること自体を指す。難民とディアスポラの違いは、前者が元の居住地に帰還する可能性を含んでいるのに対し、後者は離散先での永住と定着を示唆している点にある

・男児に割礼

ところで、ユダヤ教には生まれた男児に割礼（ブリット・ミラー）をほどこすという欠かすことのできない儀礼がある。割礼とは生命と生殖のシンボルである性器の包皮を切り取る儀式で、男児が生れてから八日目に行わなければならないことになっている（「創世記一七章一一三」）

生命を生み、存続させる器官である性器を流血の儀式によって聖化し、男児は生誕八日目に

して神との永遠の契約を結び、生涯消えることのない印を受け、ユダヤ教への属性を完璧なものとする。

このように乳呑み児でありながら、すでにユダヤ人同胞の一員となった幼児は、運命共同体の存続と将来への希望、保障としてきわめて大切な存在となる。この割礼の伝統こそ、ユダヤ人が子宝としての幼児を大切にし、最善のものを与えようとする出発点になっている。

・ユダヤ的学習方法

自分の意見や主張をはっきりと提示して論争することを躊躇する日本人の習慣は、個性のない、個の確立が弱い日本人の人格と無関係ではあるまい。そう考えると、対話や議論、自己主張を前提とするユダヤ的教育の伝統は、日本のそれときわめて対照的であることを知るのである。伝統として受け継がれたユダヤ的学習方法は、大別して二通りある。

第一は、不動である**神の律法トーラー**をそのまま、常に声を出して反復、復唱して、間違いなく暗唱し完璧に学ぶこと。この学習方法を通してユダヤ人は重要事項、いついかなる時も忘れてはならない事柄を確実に覚え込む方法を学ぶ。

第二の方法は、**律法の伝承タルムード**を学ぶ時は、そのまま鵜呑みにすることなく、常に**質問、疑問を提示して議論を重ね、十分な話し合い**、論争の後、その時々にはふさわしい律法の適用を学ぶという方法である。

先人賢者たちの伝承律法である「タルムード」は、そもそもヘブライ語で「学習」を意味する。聖典そのものとしての「トーラー」は「教える」という動詞に由来する「(神の) 教え」を示す言葉である。これも、ユダヤ教が「学びの宗教」といわれる所以である。

このような学習方法に基づくユダヤ教育所の存在は、「トーラー」が成立した紀元前五世紀には跡づけられる。また遅くとも紀元二世紀中頃以来、五歳以上の男児の全日制基礎学校への通学は慣例となっていた (R・M・ヘルヴェーク『ユダヤ人の母』八二―八四頁)。

学校で子供たちは律法を丸呑みに学ぶのではなく、各自が対話や議論を通して体得し、学習しなければならないことが明示されていた。それは一人一人が修得した神の綻を、身をもって実行しなければならないからである。

台所の大きな

食卓には安息日のはじまる夕食がすっかり準備され、食卓の中央にはユダヤのシンボルである**七枝の燭台**が置かれ、ラエール女史の点火を待っていた。

<メノラー>



黒いキッパー (ユダヤ人の男性が頭にのせる小さい帽子)

・小学一年から留年 (落第) がある

ユダヤ人学校はもとより、普通のドイツの学校でも、**小学一年から留年 (落第) がある**。個々の学習意欲や能力を大切にドイツでは、クラス全体よりも、個の存在の方が肝心なのであり、本人の意欲と能力が基準に満たなかったと判断された場合には、その学年をもう一度やりなおすことが教師の側から勧告され、保護者もクラス担任の勧めを受け容れる。しかも、

ドイツでは親子が希望して留年するという決事も決して稀ではない。

事実、**筆者の長男も希望留年で小学一年を二度くりかえした**。学校教員をしていたドイツ人の妻が希望して、クラス担任と交渉し、息子にもう一度、小学一年をやり直させることにしたのである。日本ではあり得ない義務教育での落第は、ドイツでは当たり前なのだ。日本人の私でも恥ずかしいとか周囲に気をつかう必要がまったくないのは、それが公認され、誰でもやっていることだからであるし、身につけるべきものを持たずに進級するのは、本来その子供のためにならない。